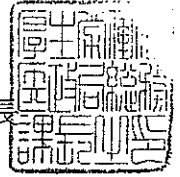




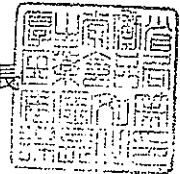
医政総発第0627001号
薬食安発第0627001号
平成19年6月27日

各都道府県医政主管部（局）長 殿

厚生労働省医政局総務課長



厚生労働省医薬食品局安全対策課長



医療事故情報収集等事業第9回報告書の公表について

医療行政の推進につきましては、平素から格別の御高配を賜り厚く御礼申し上げます。
今般、(財)日本医療機能評価機構より、第9回報告書が公表されました。医療事故情報と共にヒヤリ・ハット事例情報も併せて報告されています。また昨年12月から、医療事故情報収集等事業の一環として提供を開始した、医療安全情報 No.2「抗リウマチ剤（メトトレキサート）の過剰投与に伴う骨髄抑制」、No.3「グリセリン浣腸実施に伴う直腸穿孔」、No.4「薬剤の取り違い」についても掲載されています。

本報告書においては、個別テーマとして「薬剤に関連した医療事故」、「医療機器の使用に関連した医療事故」、「医療処置に関連した医療事故」、「検査に関連した医療事故」について、医療事故情報及びヒヤリ・ハット事例情報についての分析が行われているとともに、別添のとおり共有すべき医療事故情報が報告されています。

貴職におかれましては、同様の事例の再発防止及び発生の未然防止のため、本報告書の内容を確認の上、別添の内容について留意されるとともに、貴管下医療機関等に対して、注意喚起を促すよう周知方お願いいたします。

なお、本報告書につきましては、別途(財)日本医療機能評価機構から各都道府県知事宛に送付されており、同機構のホームページ(<http://jcqhc.or.jp/html/accident.htm>)にも掲載されていますので申し添えます。

IV 共有すべき医療事故情報

【1】「共有すべき医療事故情報」

平成19年1月1日から同年3月31日までに報告された事故事例を分析班等において個別に検討する中で、広く共有すべきであると考えられた事例の概要等を図表IV-1に示す。

図表IV-1 共有すべき医療事故情報

概要	内容
薬剤	外形の類似による薬剤間違いが報告された（事例概要については本報告書75頁 図表Ⅲ-1 7番参照）。 ラシックス注と間違えて、ホリゾン注 10mg を使用した。いずれも外形が茶色の注射液のアンプルであったため、思い込んでしまった。
薬剤	名称の類似による薬剤間違いが2事例報告された（事例概要については本報告書75頁 図表Ⅲ-1 1、2番参照）。 いずれもオーダーリング画面からの処方の際に薬剤選択を間違えた。1事例はニューロタンの指示をすべきところをニューレプチルと間違えて入力しており、1事例はスロービッドの指示をすべきところをスローケーと間違えて入力した。
輸血	輸血の患者間違いが2事例報告された。 1) 手術後、A患者が帰室したベッドサイドで主治医がB患者の濃厚血小板輸血の指示を口頭で行い、次の患者の手術のため、病室を離れた。受け持ち看護師はA患者の指示と思い込み、B患者の輸血をA患者に実施した。 2) 輸血保冷庫にA患者とB患者の濃厚赤血球が保存されていた。A患者に輸血の指示が出たため、保冷庫の中からシリンジに入った濃厚赤血球を取り出し実施した。後にB患者の濃厚赤血球をA患者に実施したことがわかった。患者が異姓同名であり、ともにカタカナで氏名が記載されていた。
医療機器	MR I（磁気共鳴画像）検査での事例が2事例報告された。 1) 交通事故後、MR I撮影中、患者から「臀部に熱感がある」とコールがあった。確認すると臀部の擦過傷に当てていた湿ったガーゼがMRIの磁気と共鳴したことが原因と考えられた。 2) MR I検査時、使用する薬剤を看護師はホーローのトレイで準備した。その後、撮影台を動かした際トレイがMR Iの磁気に引き付けられて飛んだ。
移動中	患者の移動中に起きた事例が報告された。 CT検査後、ベッドの直後から点滴架台がついていく形でICUへ搬送していた。扉を通過する際に点滴台の上端が上壁にぶつかり点滴架台が急停止した。ベッドは先行していたため点滴ラインが引っ張られる形となり、その際中心静脈ラインが抜去された。

【2】再び報告のあった「共有すべき医療事故情報」

第5回報告書^(注1)において共有すべき医療事故情報として掲載し、第8回報告書^(注2)において再び報告のあった事例として再掲載した、療養上の世話に関する熱傷の類似事例2件が報告されている。

図表IV - 2 「共有すべき医療事故情報」(再掲分)

概要	内容
療養上の世話	<p>1) 化学療法中の患者が温枕を希望したため、温枕カバー、タオルなどで覆い、「熱かったら外してください」と説明した。患者はその後、眠っていた。約4時間後患者の足に発赤ができており、I度の低温熱傷と診断された。</p> <p>2) 患者の下肢に冷感があり温沈を使用した。約60度のお湯を入れ、患者の足を温枕の上に乗せた。1時間後冷感が消失したため、温沈は除去した。その後、熱傷による皮膚のびらんを発見した。</p>

(注1) 第5回報告書 P113。

(注2) 第8回報告書 P138。